## 44　吾妻鏡の鍼灸

寺川華奈
日本鍼灸研究会

『吾妻鏡』は日本中世の編年体による史書である。著者は未詳であるが、平安末期の治承四年（一一八〇）四月九日より、鎌倉中期の文永三年（一二六六）七月二十日に至る記事が載せられており、鎌倉幕府の草創期から鎌倉中期に至る八十余年の政治・経済・社会・文化を伺い知る上での最重要資料となっている。また作品としての文学性も高い。戦国の頃よりしばしば書写され、江戸時代に入ってからは、活版として広く流布し、武士の教訓書として、あるいは婦女子の教育書として用いられた。徳川家康も本書を愛読したと伝えられている。

『吾妻鏡』は日録の形式で綴られており、一見、幕府の公式記録然とはしているものの、その成立については、特に明治以降、様々な考証がなされてきた。その結果、現在では、後代の編纂・追記をうけてなったものであることが明らかとなっている。しかしながら、『玉葉』『明月記』などとともに、我が国の古代末期より中世に至る歴史の基本的資料であることには変わりない。したがってまた、未だ分明ならざる中世の鍼灸について言及する際にも看過できない書物である。

本書では鍼灸に関連する言葉として、「灸」十一ヶ所、「鍼（鍼博士）」一ヶ所が見られる。ただしいずれも「灸有数箇所」「灸者謂何箇所」「将軍家令加御灸五六个所御云々」のような記載に留まり、穴名や施術部位などは不明である。また、平安期の鍼灸施術では常に重視されてきた「人神」などの禁忌についての記述も見られない。こうした点は『玉葉』などとは対照的である。

灸術に関する記載の初出は、文治元年（一一八五）十月六日に梶原源太左衛門尉景季が源義経と京都にて対面し、その模様を頼朝に報告する場面で、施灸の対象は義経である。全巻を通じては「灸」五ヶ所、「御灸」三ヶ所、「灸治」三ヶ所の記載が見られ、その対象は

「将軍」一ヶ所、「御臺（所）」二ヶ所、それ以外の八ヶ所は武士となっている。施灸の壮数・禁忌及び施灸による症状の緩解・増悪といった記載はない。また術者に関しての記載も見当たらない。

鍼術に関する記載は、正治元年（一一九九）三月十二日に「姫君追日憔悴御、依之為奉加療養、被召鍼博士丹波時長之処、頻固辞敢不応仰、件時長当世有名医誉之間、重有沙汰、今日被差上専使、猶以令申障者、可奏達子細於仙洞之旨、被仰在京御家人等云々」と見られるのが唯一であり、施術には及ばなかったことが分かる。なお記事中に見える丹波時長は、平安末期に活躍した有名な丹波頼基の家系に連なる医家で、典薬頭や権侍医を歴任し、その子の長世も施薬院使などに任ぜられ、建長（一二四九～一二五五）・文永（一二六四～一二七四）の間には鎌倉の医療を管掌している。

『吾妻鏡』に鍼灸の記載は、『玉葉』や『明月記』に比べてその数が少なく、具体性にも乏しい。史書と日記という性格の違いを別にしても、そこには鎌倉幕府の医療施策全般に対する関心の薄さが見て取れるように思われる。ただ数少ない記載を通じても、古代や中世の鍼灸の特徴である灸法中心の傾向は明確である。また『玉葉』に見られるような禁忌の記述が見られないことには、古代から中世への時代の変化にともなう現実的、実践的な意識の在り方を見ることができるように思われる。